

ンをひつつかんで乱暴に書いた。

——お父さん、ギターひいてよ！

ゆっくりと振り向く。ダイニングテーブルで、お母さんは眉をしかめていた。お父さんは……。

「ごめんな、里乃」

思わず顔をそむけたくなるくらい、痛々しい笑顔をうかべていた。

「お父さんはもうギターは弾けないんだ。あのギターは里乃にあげるよ」

あんなに大事にしてたギターを……。その瞬間、里乃は叫んだ。

「いけないなら捨てちゃえばいいじゃない！ あたしが捨ててくる！」

「里乃！ あなたにはお父さんがどんな気持ちでいるか分からないの！」

お母さんが立ち上がった。里乃は、ダイニングのとなりの居間にかけこんだ。

ソファの後ろに、この半年ずっと立てかけてあったお父さんのギターケース。黒いケースにうっすらとほこりが積もってる。

ギターケースを抱えて里乃は、二階の自分の部屋にかけあがった。

お母さんが呼ぶ声を無視して、部屋のドアを閉めた。

ベッドに体を投げ出す。

「……こんなつもりじゃなかったのに」

お母さんに言われなくなっちゃって、お父さんがこの半年どれだけ苦しんでたか知ってる。

だから、ずっと考えていた。……お父さんに、もう一度、音楽を楽しんでもらう方法。

里乃のお父さんは耳が聞こえない。半年前、髄膜炎という病気で熱が四十度もでて入院した。熱は一週間くらいで下がったけど、耳が聞こえなくなっちゃった。髄膜炎のせいで耳の中に炎症がおきてしまったのだ。

それ以来、小林家では音楽がながれることはびたりとなくなかった。

お母さんは鼻歌を歌わなくなったし、CDを流すこともなくなかった。しーんと静かな家の中で、お父さんは本を読んだり、字幕の映画を見たりしてる。

里乃は、小学校5年生くらいまでは、お父さんのギターで歌ったり、音楽の話をしたりしてた。塾に行くようになってから、お父さんと話す時間が少なくなっちゃって、耳が聞こえなくなっちゃっては、ホワイトボードに何をどう書けばいいのか分からなくてよけいに話をしなくなっていた。

話さないから距離が広がる。距離が広がるからますます話しくくなる。

あんな顔をさせたかったわけじゃない。